

大本山  
永平寺

大光明藏建築圖集

大本山  
永平寺  
大光明藏建築圖集

昭和五年三月

魚津弘吉藏版

## 序

棟梁魚津弘吉氏の技術的熱心と異數なる努力によつて愈光明藏が見事に出來上つた。

今回永平寺の境域内に澤山の建築が新築されたが其出來ばへに於て最も光つて居ることは古來傳統的に飛彈の工匠の流れを傳へて居ると云はれて居る名古屋大工の名譽の上に万丈の氣焰を吐いたものと云ふても敢て過言ではあるまい、勿論其後援者の支持の爲めに安心して仕事が出来たことも此成功を齎した原因とはなつて居ようが、棟梁として魚津氏の技倆は充分推賞するに値ひすると思ふ光明藏の竣工に當つて思ふが儘を述べて序に代へる次第である。

## 光明藏の落成を見て

永平寺本山光明藏改築は萬事滞り無く落成を告げました、本山の歡びは申す迄も無い事でも有りますが、長い年月の勞苦の報ひられた、棟梁を初め一同の喜びの如何に大きいかは察するに餘り在るのであります。實を申しますと、初め棟梁を武田博士に紹介致す時には年の若い爲に稍躊躇致したので有りますが、熟慮の結果曩に覺王山大書院建築を短日月に而も見事に成就せしめた非凡の手腕を想起しますと共に其平生職務に忠實に、世に佞らはず孜孜として勵む有様が、齡は僅かに三十三で有りますが普通の棟梁とは慥に異つた處が有りまして假令紹介致しても名譽を失墜せしむる等の事無きものと認めましたから、決然其の勞を採つたのであります。而して幸にも博士の御快諾を得まして萬事御指導を受け遂に今日の成功を見るに至つた次第で有ります。

彼は目下高野山金堂の大建築にも携つて居りますが、彼の性質として利慾を度外に措き専心勵んで居りますから、是亦立派に成功する事と思ひます。彼の建造物には慥に彼の人格が表現せられて居ります。これは丁度吾國建築界の「オーソリティー」と喚ばれた故辰野博士の設計が博士の人格を如實に現はして居るの相似して居るのであります。現在の彼は素より完全なる技術者と申す事は出来ませんが、青年棟梁として慥に有望の人物であつて將來に於て中京の工匠として辱ぢない大棟梁となる事を確信しますから、光明藏の落成に當り之れを世に紹介するの勞を採るのも無意義に非ずと思ふのであります。

在名古屋

建築士

西原吉治郎

## 光明藏は工藝の殿堂

棟梁魚津氏は北國に工藝の殿堂を築かれました、寫眞挿畫で御高覽の通り實に壯嚴華麗を極めたもので、雲に舞ふ鶴の欄間、格天井の漆塗金金具などの配置を眺めると恰も藤原氏全盛時代の榮華も斯くこそこの感が湧きます、特に檜の美薫を嗅ぎ乍ら上段の間に端座して居ると身は何時しか極樂淨土へ遊んで居る様な氣持が致します。斯かる美装は容易なことでは出来上るまい、御佛の御守護もあつたのではないかと思はれる程に魚津氏の技倆の卓越せることが直感されます。恐らく後世に至つて彼の國寶たる平泉の中尊寺や、宇治の平等院、等と共に久遠の誇とされるであらう。内部の工藝裝飾品等凡ての点に光彩を放つて居る事は實に光明藏の名に背かず海外迄も國粹建築の龜鑑として賞觀せられることであらう。

御 挨拶

大本山永平寺二祖孤雲懷辨禪師六百五十回大遠忌の爲に愛知縣曹洞宗寺院並に檀信徒各位の御寄進よりなる悉堂伽藍の隨一として最も重き大光明藏の再建工事を不肖へ御下命に與りました事は若輩の身に餘る光榮であり又工匠として一家一門の譽であります。從て御高命を拜しましたる私は身命を堵してもこの靈域たる山上に永遠に當代の代表的建築を遺したいこの念願を以て日本建築界の權威たる京都帝國大學教授工學博士武田五一先生の御指導を受けて昭和二年の三月着工致しました。

爾來歲を経る事三星霜其間構造計畫に於ては元愛知縣技師西原吉治郎氏、漆工金工等の裝飾的技術に關しては金澤縣立工業學校教諭太田誠二氏、繪樣及彫刻の意匠圖案に關しては工學士藤原義一氏等を煩はし。建築工事全般の施工に關しては不肖心血を注ぎて幸に何等の支障なく昨冬十二月之が竣工を遂げました。

是れ偏に佛祖の加護によるは申すまでもなく更に愛知縣各寺院諸老師の甚深なる御後援。諸先生の御懇篤なる御指導によるものと感銘する次第であります。茲に御挨拶旁聊か歡喜の辭を添へ謹で御厚情を感謝いたします。

尙此寫眞帖には各々解説を附して置きましたから何卒詳細に御閲覧下されんことを御願ひする次第であります。

説明概要 魚津弘吉

名 稱 大本山永平寺大光明藏

所 在 福井縣吉田郡志比谷村吉祥山 福井驛より永平寺電鐵にて永平寺門前驛下車、約三丁にして山門に到る

沿革 大光明藏は開山承陽大師のここに親しく法輪を轉じ給ひし以來代々不老閣貌下が演法道場として門未僧侶、檀信徒に祖道を説かれ亦對面所として使用せられた殿堂で本山中最も重要な建物であります。而して古來幾多の變遷改築がありましたがその規模の廣大偉觀はよく溪聲山色に調和し依然當山の重きをなしてゐました。最後は天明元年頃の建立になり腐朽甚しかつたのを今回大遠忌に當り愈よ改築せられここに至つたのであります。

工 程 昭和二年五月八日作業場たる名古屋奉安殿に於て齋戒沐浴盛大なる起工式を行ひました。大体の木造りは全部名古屋で構成し嚴重なる荷造の上汽車輸送を以て運搬。昭和三年八月中旬本山に於て立柱式を行ひ全四年十二月下旬全く竣工を遂げました。

規 模	桁行	梁行
大光明藏 七間五面	八十四尺	六十二尺四寸
大玄關	十八尺	八尺
濱 椽	四尺五寸	二百十尺

廊 下	桁行	梁行
監院寮 附屬共	五十七尺	十九尺
廊 下	六尺五寸	二十六尺

此建坪總計 貳百拾四坪九合貳勺

大光明藏 疊數	二百五十疊
監院寮 疊數	四十八疊
合計	二百九十八疊

内外形式大要

光明藏 單層入母屋造り棧瓦葺、妻は木連格子、正面大棟に定紋三個を附す  
 大玄關 千鳥破風妻入りにして軒唐破風造り、銅平板葺、式台付き  
 監院寮 單層入母屋造り棧瓦葺、妻は木連格子

日本寺院建築、中古時代の粹を抜き、内部は中央に大廣間百二十六疊、正面に上段の間十二疊を設け左右に脇間各八疊に書院火燈窓、納戸口を構へ、正面鴨居上には豎四尺延長七間四枚の總彫の鶴の欄間を嵌込み、三方に箴欄間を廻らし正面は古式に倣ひ御簾を掲ぐ、三方には幅九尺の入側を廻らし外部には巾四尺五寸、高欄付き濱椽を付す。

# 大光明藏建築圖集 目次

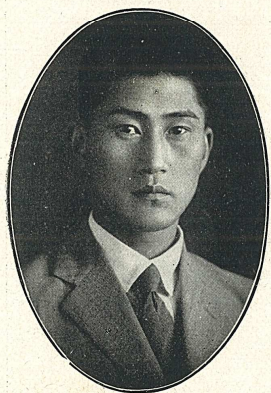
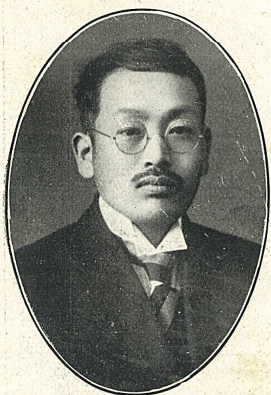
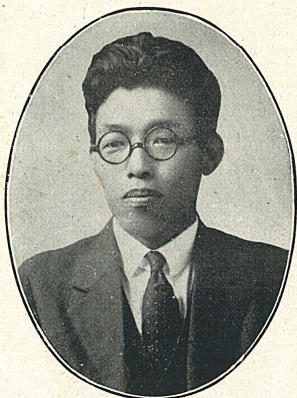
第壹圖	建築關係者肖像	第十一圖	天上見上
第貳圖	不老閣貌下御下附の眞筆	第十二圖	上段脇書院
第參圖	永平寺境内全圖	第十三圖	上段脇納戸口
第四圖	大光明藏監院寮平面圖	第十四圖	入側より見たる書院の外形
第五圖	大光明藏外觀	第十五圖	入
第六圖	大玄關	第十六圖	大廣間電燈
第七圖	大玄關正面扁額	第十七圖	椽側
第八圖	大廣間正面	第十八圖	法堂前より見たる監院寮外觀
第九圖	大廣間側面	第十九圖	監院寮相見の間
第十圖	大廣間正面彫刻	第二十圖	監院寮内寮
			以上



一、  
 上 工學博士 武田五一先生  
 右 建築士 西原吉治郎氏  
 中 工學士 藤原義一氏  
 左 金澤縣立工業學校教諭 太田誠二氏  
 下 棟 梁 魚津弘吉

# 大光明藏建築圖集 目次

第壹圖	建築關係者肖像	第十一圖	天上見上
第貳圖	不老間貌下御下附の眞筆	第十二圖	上段脇書院
第參圖	永平寺境內全圖	第十三圖	上段脇納戸口
第四圖	大光明藏監院寮平面圖	第十四圖	入側より見たる書院の外形
第五圖	大光明藏外觀	第十五圖	入側
第六圖	大玄關	第十六圖	大廣間電燈
第七圖	大玄關正面扁額	第十七圖	椽側
第八圖	大廣間正面	第十八圖	法堂前より見たる監院寮外觀
第九圖	大廣間側面	第十九圖	監院寮相見の間
第十圖	大廣間正面彫刻	第二十圖	監院寮内寮
			以上



## 一、

上 工學博士 武田五一先生  
 右 建築士 西原吉治郎氏  
 中 工學士 藤原義一氏  
 左 金澤縣立工業學校教諭 太田誠二氏  
 下 棟 梁 魚津弘吉



二、永平寺不老閣貌下御下附の眞筆御賞詞

紺本軸物



感謝狀

魚津弘吉殿

貴氏這般大光明藏建築棟梁  
シテ工事ヲ擔任シ結構堅實輪奐完  
美此其竣工ヲ告テ謂ツシ昭和聖  
代殿堂建築ノ範ヲ垂ルテ祝下ノ  
特ニ妙技入神四大字ヲ書シテ之ヲ  
嘉シ給テ更ニ銀製香爐壹箇ヲ添  
ヘテ感謝ノ意ヲ表ス

昭和五年午春

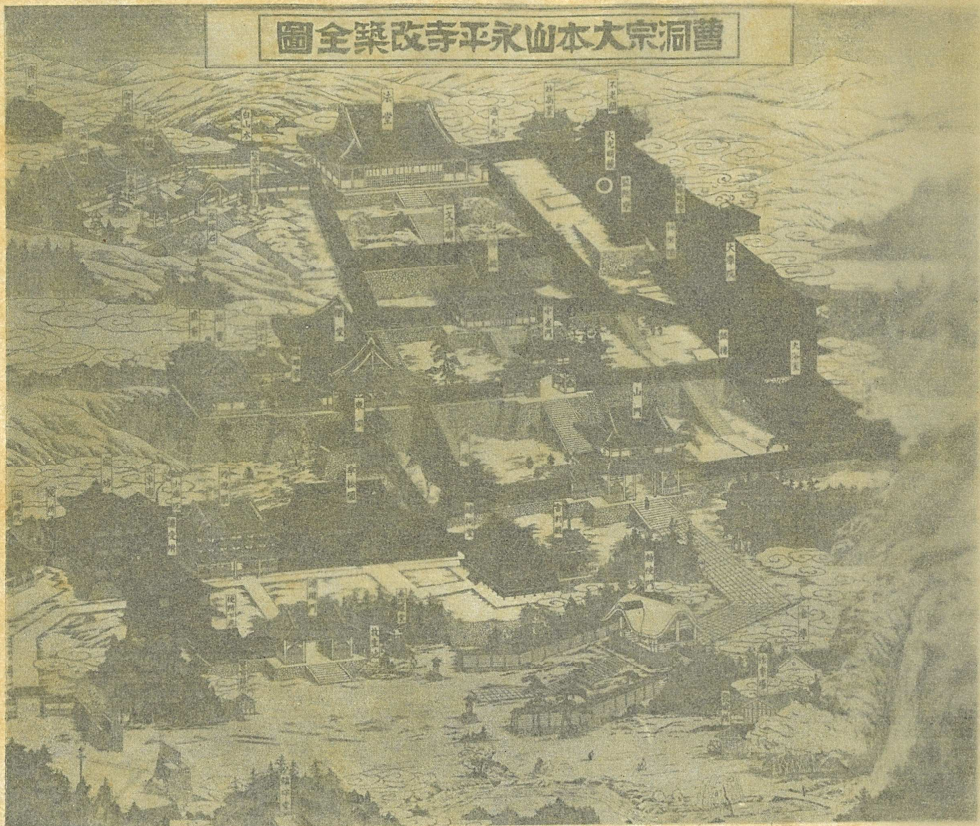
曹洞宗大本山永平寺

監院 熊澤泰禪



永平寺より御下附  
の銀の香爐

曹洞宗大本山永平寺改築全圖



三、永平寺境内全圖

黒い部分は今回大遠忌に當つ  
て改築せられた建物。

○印は大光明藏他は全て舊建  
物、多くは天明寛政時代の建  
立になる。



感謝狀

魚津弘吉殿

貴氏遠般大光明藏建築棟梁  
シテ工事ヲ擔任シ結構堅實輪奐完  
美此ニ其竣工ヲ告テ謂フニ昭和聖  
代殿堂建築ノ範ヲ垂ル体ヲ現下ノ  
特ニ妙技入神ノ四大字ヲ書シテ之ヲ  
嘉シ給テ更ニ銀製香爐壹箇ヲ添  
ヘ以テ感謝ノ意ヲ表ス

昭和五庚午春

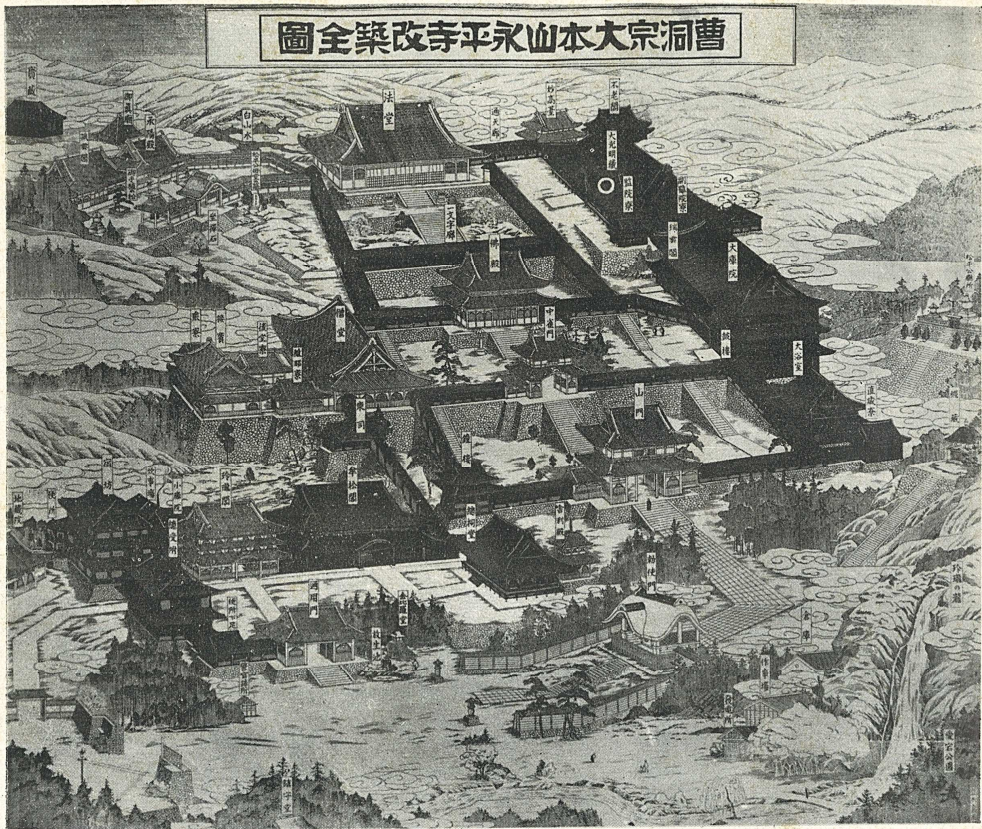
曹洞宗大本山永平寺

監院 熊澤泰禪



永平寺より御下附  
の銀の香爐

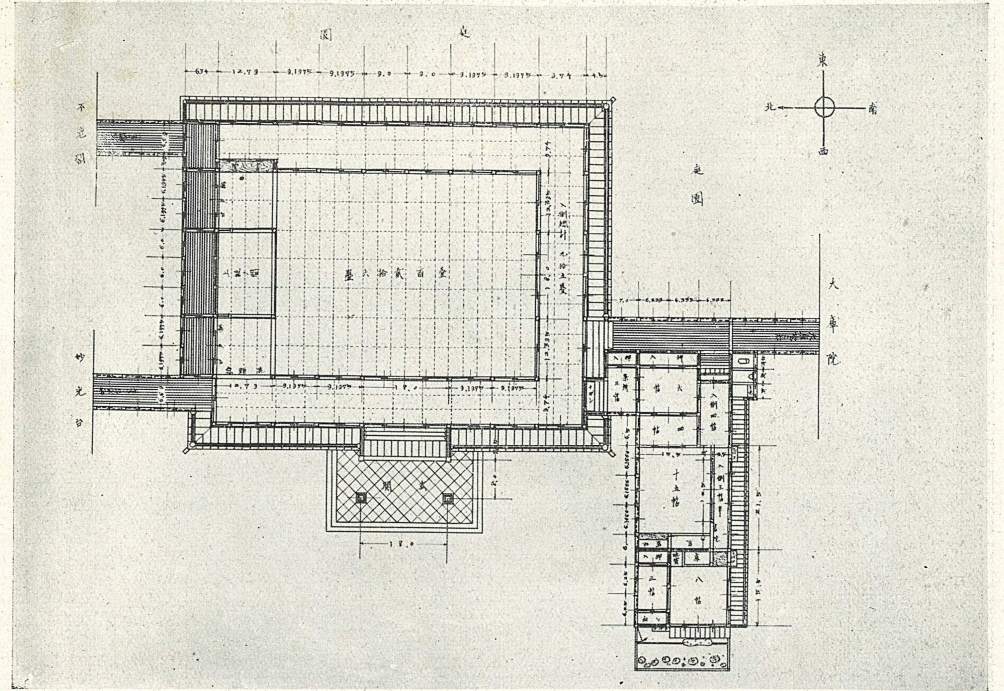
曹洞宗大本山永平寺改築全圖



三、永平寺境内全圖

黒い部分は今回大遠忌に當つ  
て改築せられた建物。

○印は大光明藏他は全て舊建  
物、多くは天明寛政時代の建  
立になる。



#### 四、大光明藏 監院寮平面圖

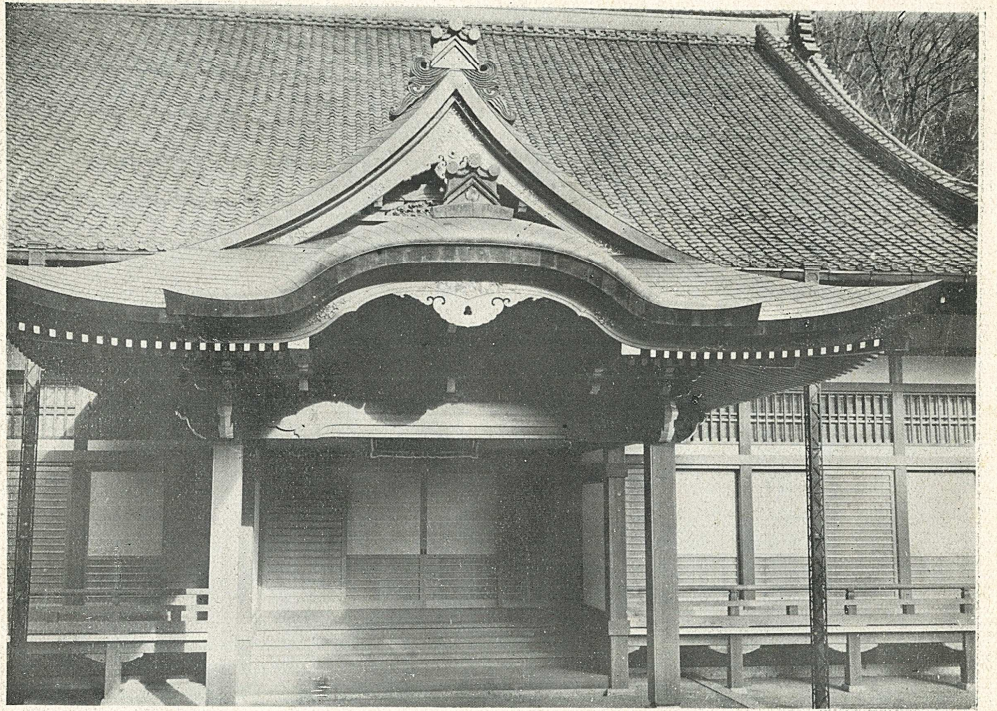
北國地方に於ては雪の關係上濱椽を附せざる習慣なるも種々研究の結果支障なきことを確め三方にこれを廻らして建物の形体を完備せしめたり。

廊下南方は大庫院に、北東は不老閣に、北西は妙光台及法堂に通ず。東と南は庭園に面し、明障子及び欄間を設けて通風採光を充分にす。

#### 五、大光明藏外觀

八間五面單層入母屋造、軒二重疎まほら極、柱檜八寸角面取、舟肘木を持つて桁を支へ、三方縁側擬寶珠勾欄をめぐらす。

木割は太く強壯なるも、書院造の形式秀麗閑寂の氣品を生命とす、大棟高六十尺、軒高二十二尺、屋根の形状等此地方の氣候風雲に適應し四圍の山堂に調和せしむ、而して建物最も永久保存のため從來の松、樺等を排し檜材を使用せり。

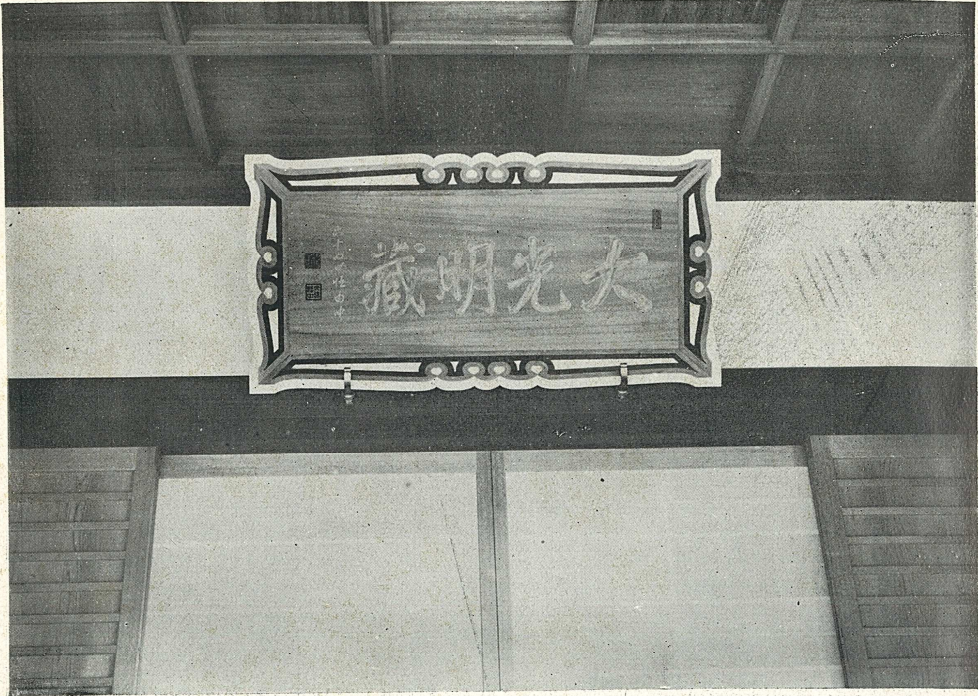


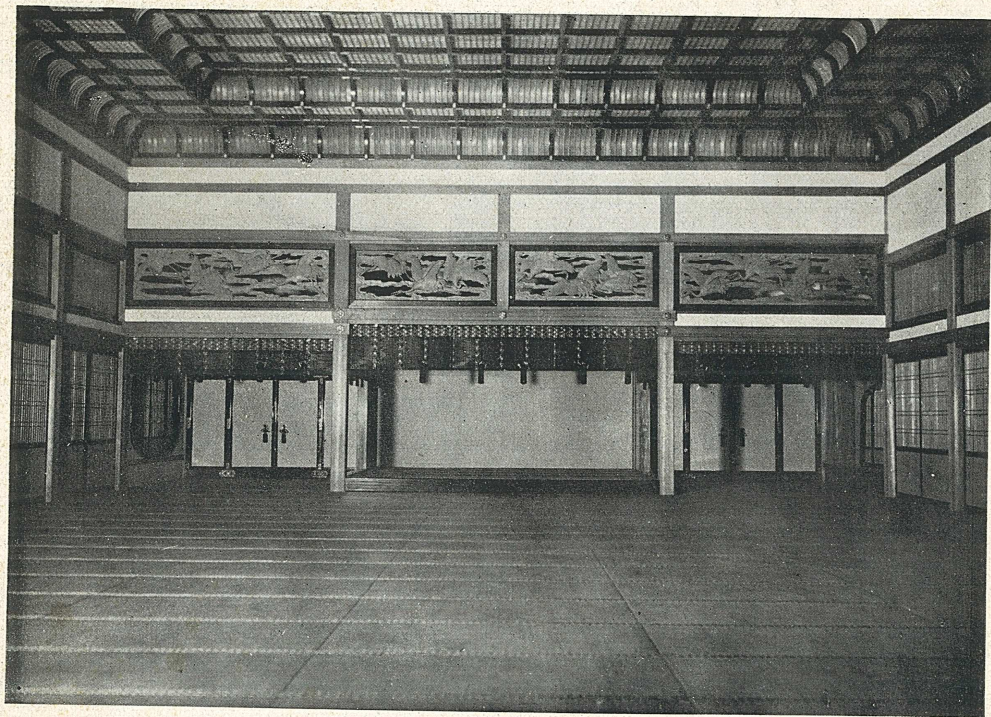
## 六、大玄關

光明藏舊玄關の形式を多分に尊重し、正面唐破風造り、千鳥破風を重ね、軒下組物間の彫刻、木鼻等の裝飾稍豊富なり、而も細部の手法はあくまで堅實上品を旨とし、破風軒先に打つ寶相花唐草の透金具等亦豊麗雄健以つて本殿の有する氣風と一脈通するところあらしむ。正面柱は檜一尺一寸角。舊玄關は現在下の寺務所受付に移建保存さる、その彫刻、木鼻、妻飾等比較するに便なり。

## 七、大玄關正面扁額

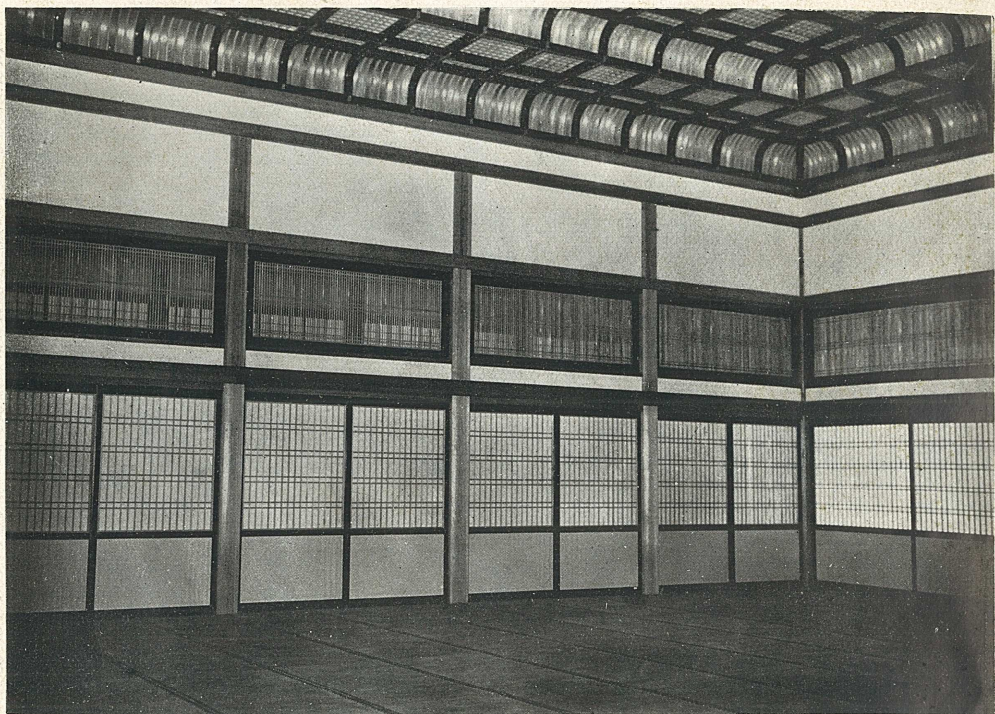
周縁は群青、緑青、白緑の縹網彩色、中の文字は前貌下森田禪師の御筆になる「大光明藏」の扁額より縮寫して彫沈め、群青で彩る、大遠忌に當つて私の奉納せしをここに掲げるの光榮に浴せしものなり。





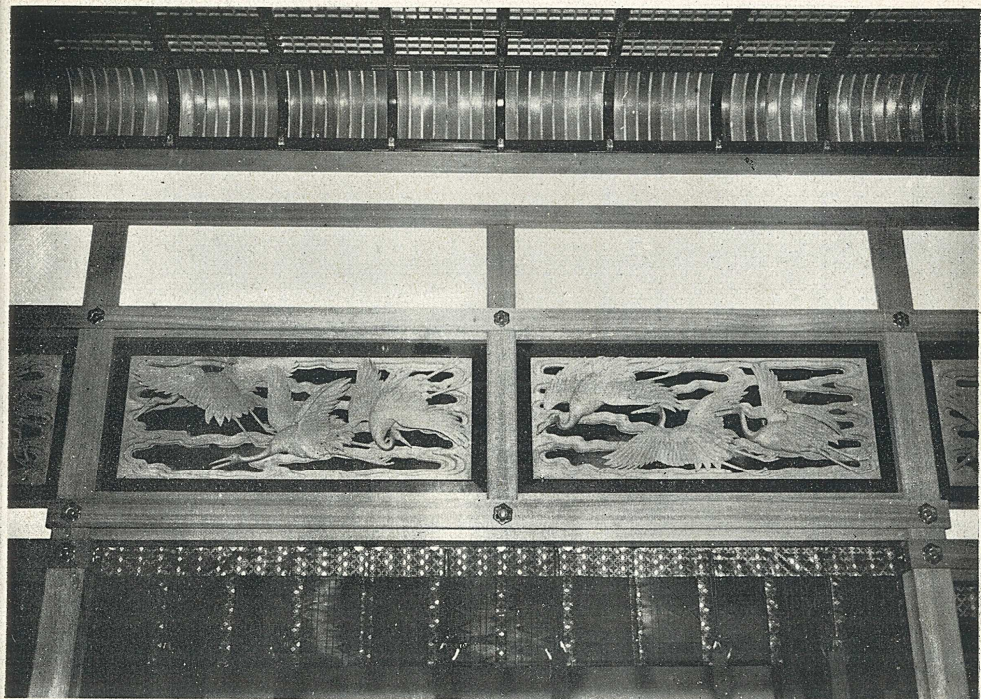
## 八、大廣間正面

廣さ百二十六疊、天井高二十二尺二重折上小組格天井とす。  
 正面中央上段の間十二疊、左右の脇間各八疊に書院、納戸口は不老閣、妙光台に通じ、貌下役寮御出入の口とす。  
 三方入側を廻らし、その間は腰高舞良障子、柱は木曾檜八寸角及び九寸角を用ひ、上部長押には金銅の六葉飾金具を打つ、鴨居高七尺六寸上部に巾四尺の大欄間を納め、規模雄大にして簡素禪宗の傳統的氣品を示し得たるを誇りとす。  
 尙上段背後の張壁及納戸には近く小室翠雲畫伯が一世の靈筆を振はるゝ豫定にしてこれが完成のあかつきには更に一段の光彩を放つべきこと、信す。



## 九、大廣間側面

正面欄間の、霞に鶴の吉祥彫刻に對して、側面は穩健高尙なる箴欄間とす。  
 欄間椽は面取黒漆、障子の腰は白張り、片面の入側に面する方は舞良とし、椽、棧は同じく漆を塗る。



十、大廣間正面彫刻

巾 四 尺

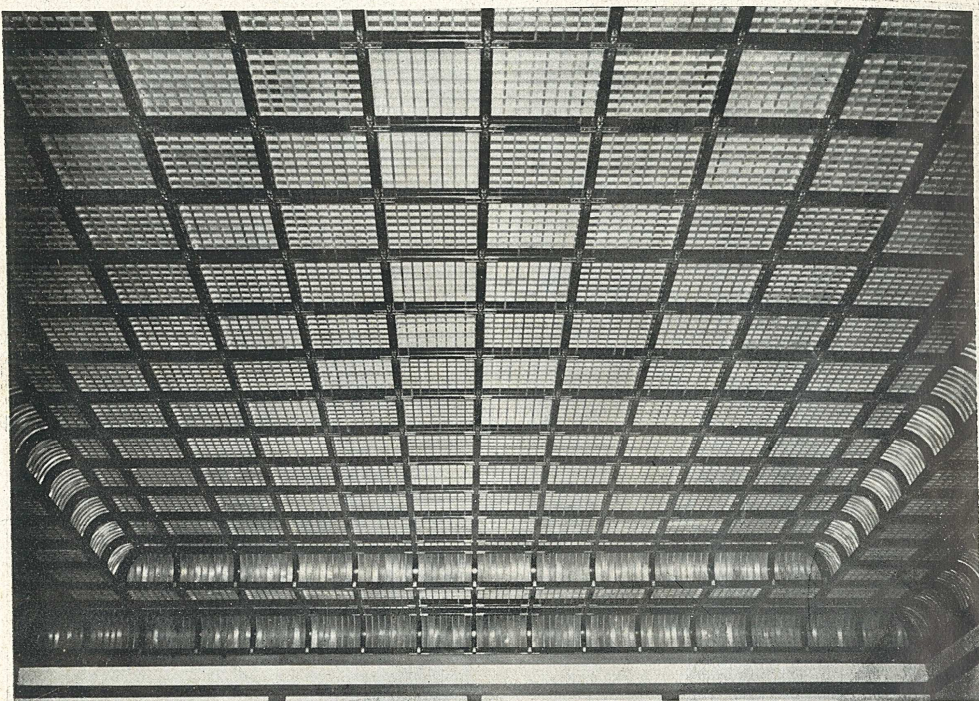
長さ 中央二つは九尺

左右は各十二尺

厚さ 各四寸檜の一木彫

霞に鶴は本山吉祥喜心の象徴、名古屋の彫刻師彫長（當代）早瀬長策氏が畢生の作なり。

正面欄間上には巾二尺五寸、長さ八尺「轉大法輪」の扁額を掲ぐ、現代不老閣貌下の御筆になる。時日の都合上この寫真に入らず。



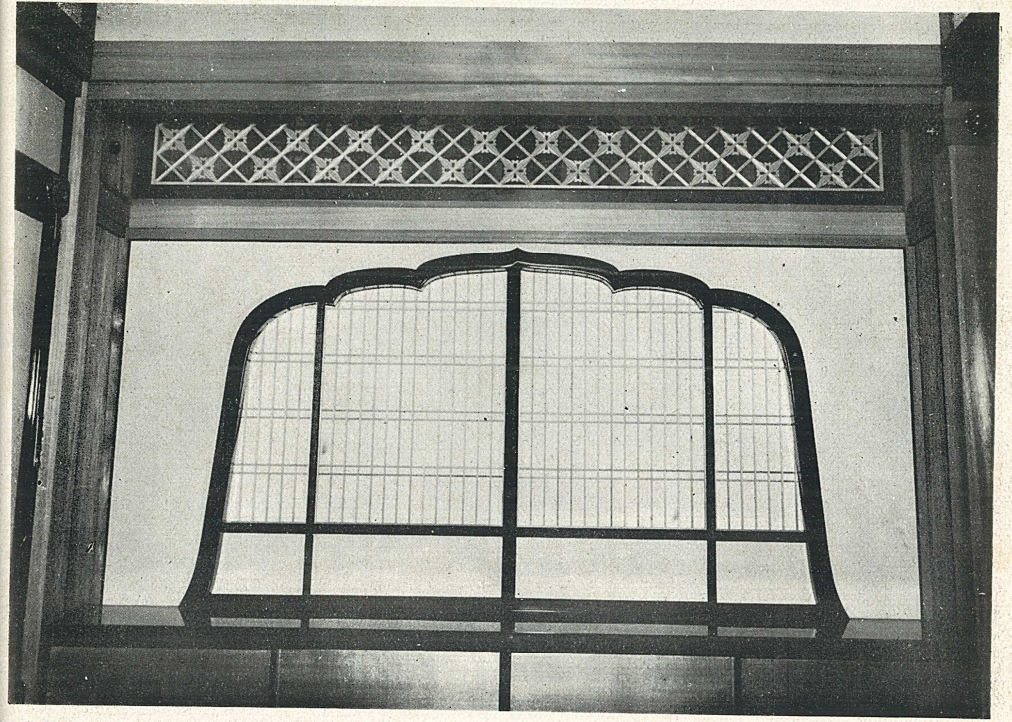
十一、天井見上

百二十六疊柱なしの持放し。

二重折上小組格天井、格椽は黒漆仕上げ、辻飾金具には寶相花模様あり。

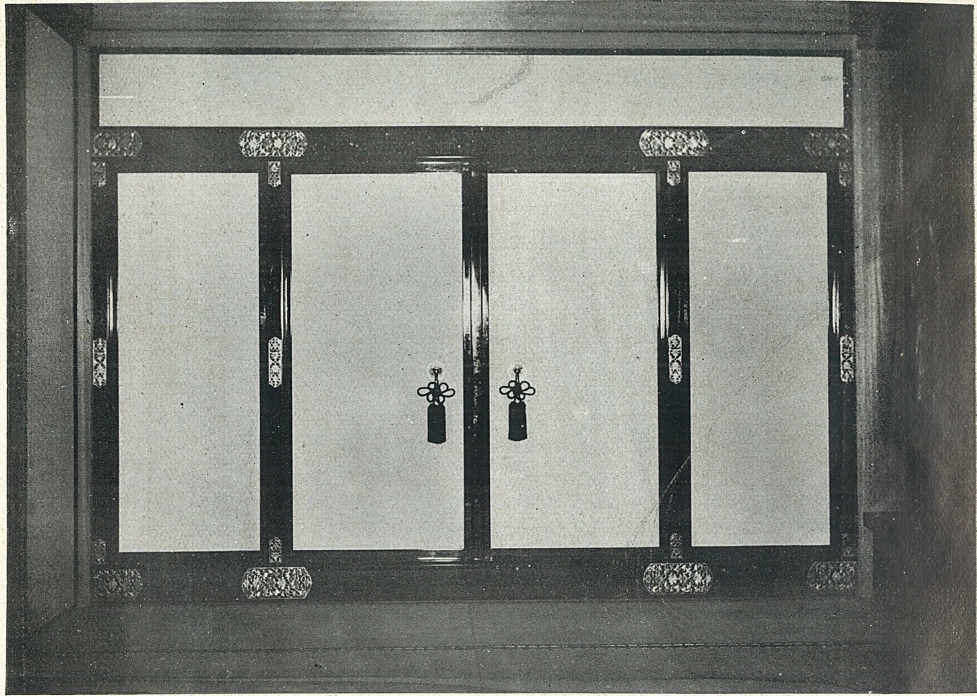
此處に取り付けらるべき優雅なる法燈に灯る日の盛觀を思ふ。

漆工は金澤市の遊部石齋氏が獻心的に努力せられ、辻飾金具は高岡工業試験場が力作す。



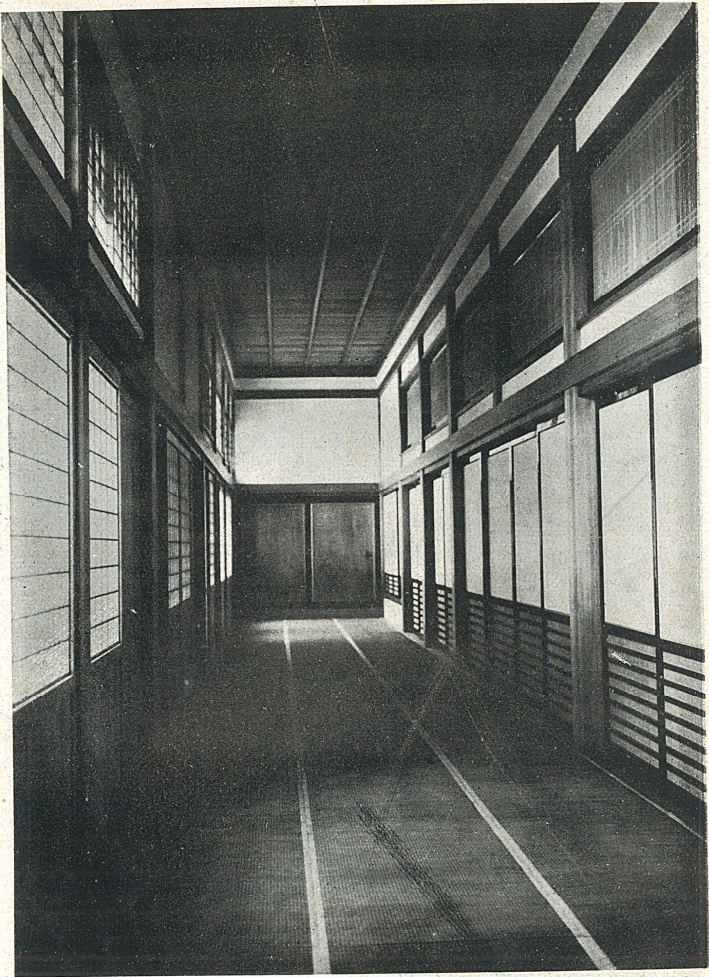
### 十二、上段脇書院

床板は檜の一枚板、黒漆塗り。  
 地袋小襖金張り、花頭窓及上部花  
 狭間の意匠亦吾國古建築の粹を取  
 り、納戸口と相まつて大廣間に一  
 段の光彩を添へるものなり。



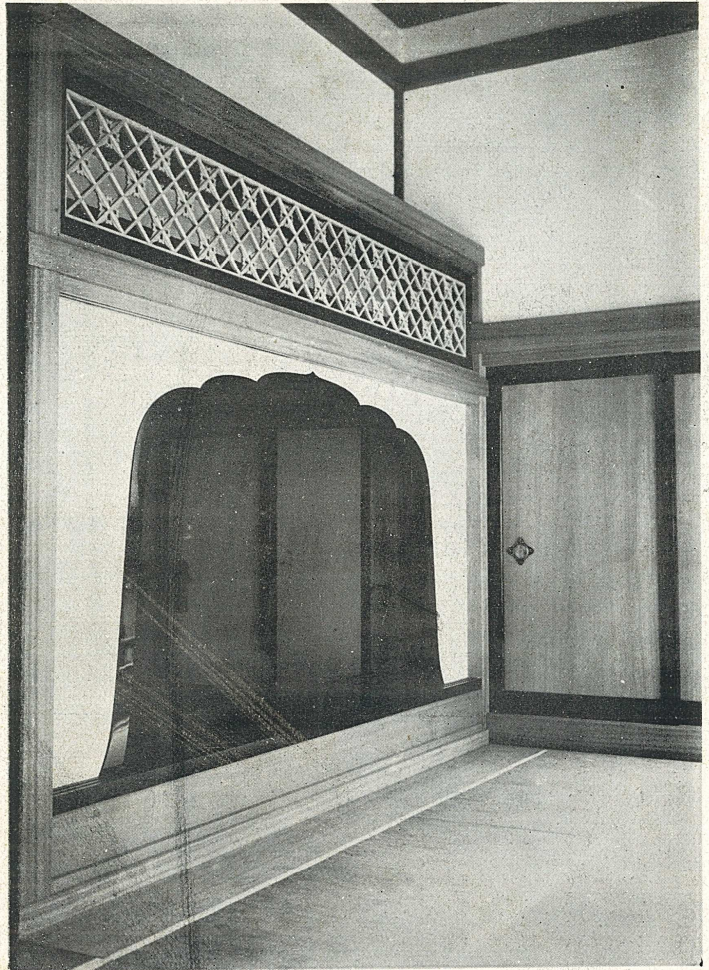
### 十三、上段脇納戸口

上段の間向つて右側は不老閣貌下。  
 左側は役寮御出入の口なり。  
 襖は白張り、縁、方立、框等黒漆  
 磨仕上、金銅飾金具を打つ、金具  
 は吾國古來最も賞美せられたる寶  
 相花唐草の透彫厚二分に餘る。  
 その鑄造技術は金澤の名工才田幸  
 三氏の苦心に負ふ。  
 古鏡形引手は中に寶相花の浮彫あ  
 り、朱房を下げる。



#### 十五、入側

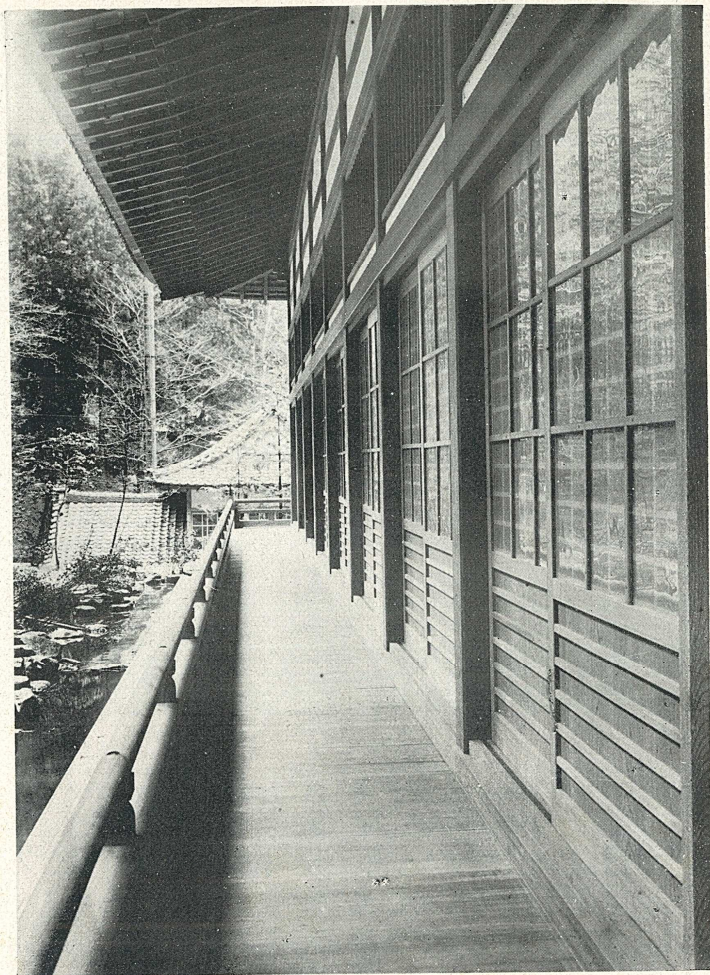
大庫院、監院寮、の廊下より入りて見たるところ、正面の杉戸は妙光台に通ず。巾九尺猿頬竿椽天井、板は檜の巾二尺五寸の正六分板。  
外部縁側との間は腰高硝子障子、上部は高く欄間を明け採光を充分にせり。



#### 十四、入側より見たる書院の外形

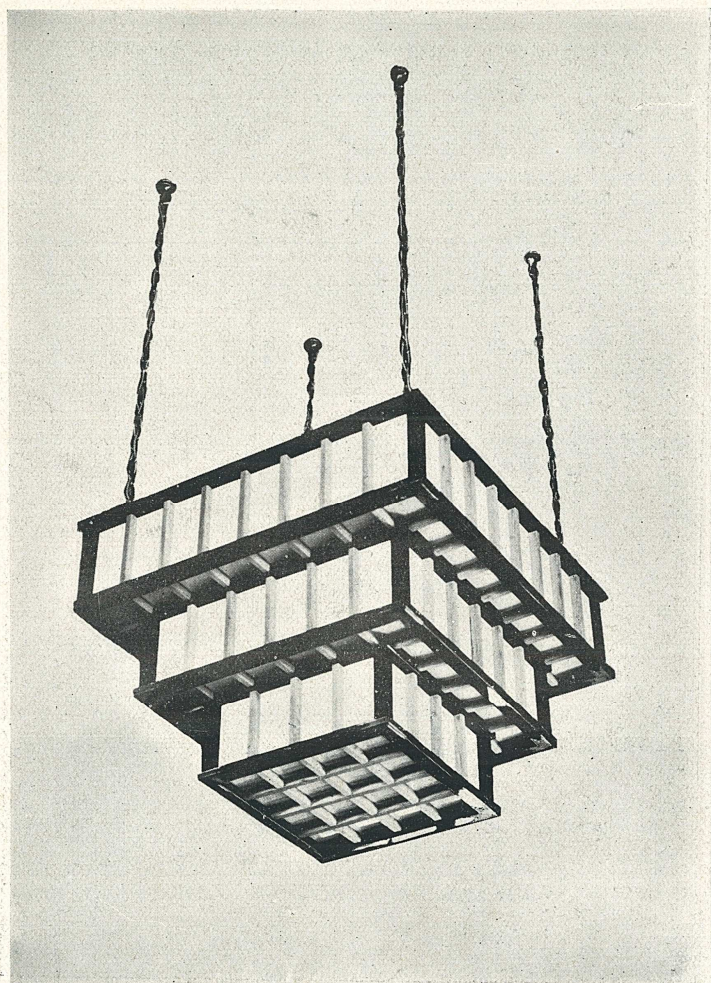
前方の戸板は不老閣に通ず、  
戸は檜の一枚板、金銅引手金具を打つ。





### 十七、椽側

入側の外部椽側巾五尺、擬寶珠勾欄を廻らす。  
軒は二重疎極小舞打ち、清楚高逸の氣風を藏す。



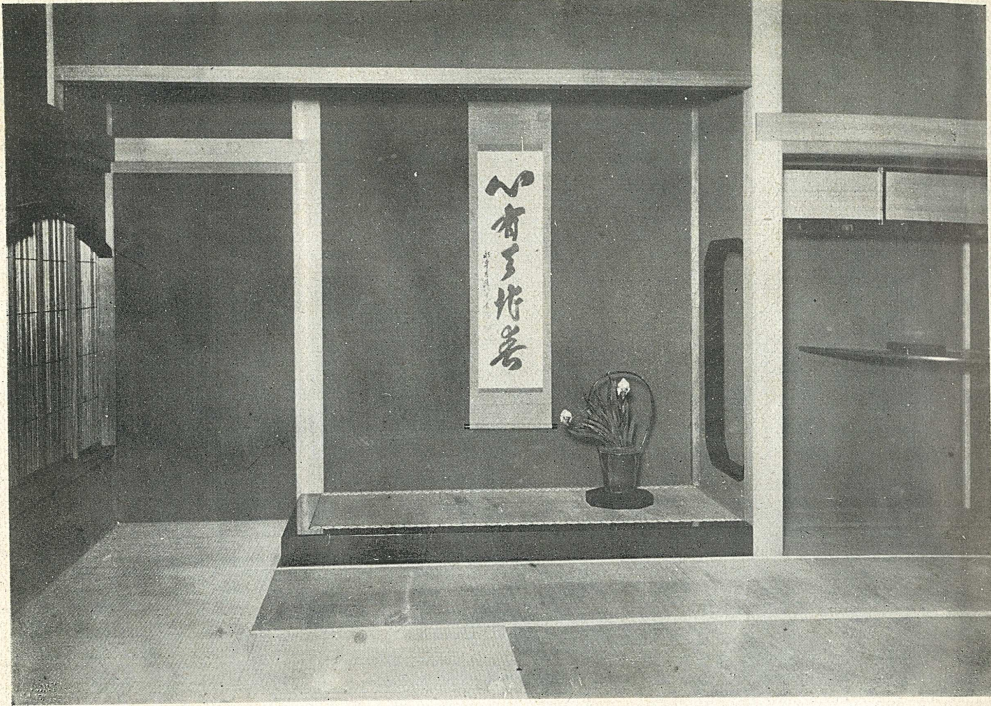
### 十六、大廣間電燈

従來の電燈は殆ど建物の性質に無關心なりしの感あり、こゝに顧み武田博士の御設計になる大廣間に最も調和する電燈を作成せり。  
大さ方三尺、木製にして飾金具を打ち、大廣間に四燈配置す。



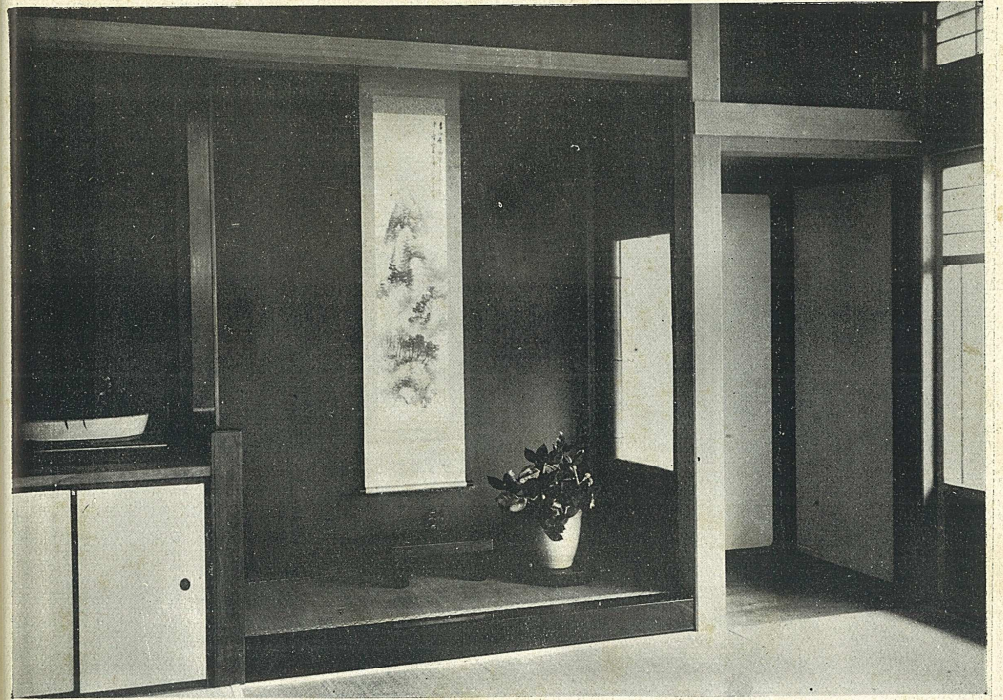
十八、法堂前より観たる  
監院寮外觀

監院老師の御居室なり。  
柱檜五寸角、軒一重疎檼、舟肘木  
を用ゆ。  
軒高十五尺、棟高二十三尺  
屋根を輕快にせし一方入母屋を深  
くし古風な獅子口を用ひて落付き  
あらしめたり。  
而して玄關に面せる方には花頭窓  
を設けて調和を保たしむ。  
向つて右方即ち南方は約二十尺の  
懸崖にしてこれに濱縁を持ち出し  
勾欄を設く。



十九、監院寮 相見の間

監院寮は大光明藏の西南隅に位す  
る單層入母屋造、監院老師の御居  
所なり。  
廊下より直ちに相見の間十五疊、  
猿頬竿縁天井檜板張り床、袋棚、  
扇棚を有し平法簡潔頗る明るき感  
あり、多く名古屋の名匠故堀田宗  
匠の筆法を用ゆ。



二十、監院寮内寮

相見の間に續く、廣さ僅に入疊、  
杉の竿椽天井、白張襖、虚飾を避  
け質素閑寂掬すべきものあり

昭和五年三月

社寺建築業  
並ニ設計製圖

魚津弘吉

名古屋市中區西日置町四十二番地  
(江川線山王橋停留所前)  
電話 西 二 一 一 番

工場 全  
桑之木島二十六番地  
(中川運河技線、江川線半丁西)